

お話た〜くさんです！ということで清書の応援しました(安藤)



とくに おいしい おかしを

作るのが とくいでした。

きょうも クロのために とっても おいしい

いたチョコを つくっています。

ときどき 村の人が たくさんきて

一どに 40 こも かっていくほどでした。

いちばん ひょうばんなのは

でっかいプリンでした。

それは 食べると ねがいが かないます。

二ばん目に ひょうばんなのは カラフルアメです。

食べたら 空をとべるように なります。

三ばん目に ひょうばんなのは 三色のジュースです。

見ためは ふつうのジュースですが のむと まいごに ならなくなります。

ぜひ みんなも トーラの家に行って おかしをかって 楽しんでくださいね。



そうしたら かわいい ヘビとねこが はいってきました。

ヘビとねこは、

「おなかが すいてたまらないんです。なにか たべものはありますか？」

ときいてきたので トーラは

「はい、いまプリンを つくっていましたので たべてもいいですよ。」

と言いました。

すると ヘビとねこは、

「ありがとうございます。あなたは とっても やさしいまじょですね。

おれいに りゅうの玉を あげましょう。」

と言って プリンを半ぶんたべて りゅうの玉をおいて 森の中へ きえていきました。

トーラは

「これは なんのために つかうんだろう。でも きれいにしなきゃ。」

と言って りゅうの玉を 水であらいました。

こすったとたんに その中から「ガラリンランガリ。」と音がして 大りゅうが でてきました。

大りゅうは

「なにか ねがいがありますか。」

と言いました。

トーラは

「とんでもない おなかのすかせた ヘビとねこに つくっていたプリンを
あげただけですよ。」

と言いました。

大りゅうは、

「なんでもいいから ねがいをはやく言ってください。」

と言いました。

トーラは

「でも…ねがいなんて あるのかしら…」

と言いました。

トーラは かんがえました。

「なにか ねがいはないの。」

と言いました。

トーラは もうかんたんなことでもねがいを言おう。

と言って、大りゅうに

「わたしは 森のみんなとプリンを たべたいです。」

と言いました。

大りゅうは

「わかりました。すぐ つれてきます。」

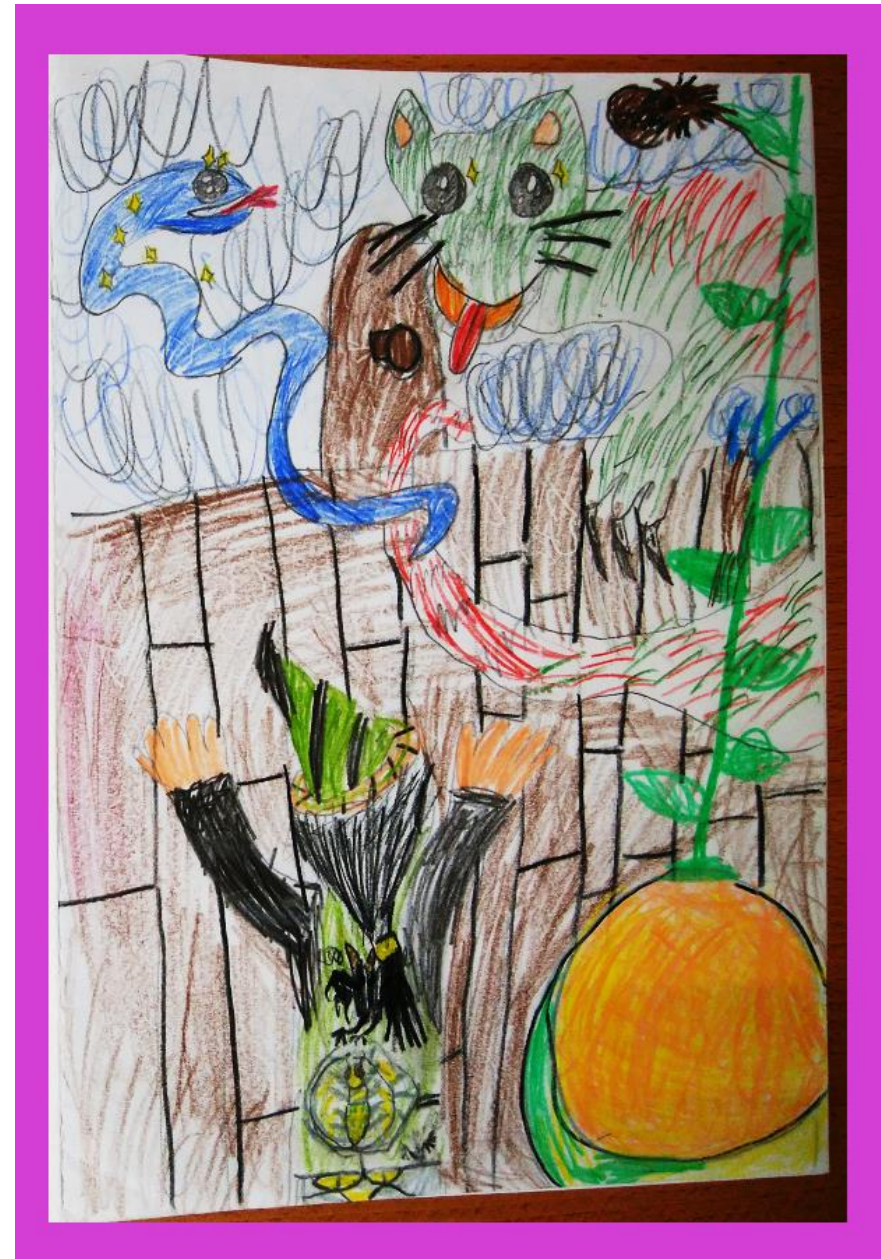
と言って森の中へ きえていきました。

三秒もたたないうちに 大りゅうはかえってきました。

そして りゅうの玉の中に もどってしまいました。

でも どうぶつたちに なべの はんぶんのプリンを
ごちそうしてあげました。

なんだかトーラは うれしい きもちでした。



トーラは すぐなおるくすりを つくろうとしました。

でも 山を 30 やま こえないとなりません。

やまで 1 時間 10 分 $30 \times (\text{かける})$ から

30 時間 300 分 (35 時間) で

やっと やまをこせるので、

そのおくの 山のなかにはいって

まぼろしのいちごがあって

これをたべると びょうきが

この日から ぜったいなくなる

みがあるのです。

トーラは、そんなじかんが かかってしまったら

この人が しんでしまうと おもいました。

でも むかし ねことへびがくれた

りゅうの玉のことをおもいだしました。



「あの玉なら もしかしたら 30 分でとってきてくれるかもしれない。」

とおもいました。

そして、王りゅうの玉を こすりました。すると王りゅうが

「よびましたか〜〜〜。」

とでてきました。

トーラはいいました。

「30 やまこえて やまおくに いちごがあるの それをとってきてくれませんか？」

といいました。

王りゅうは、

「かしこまりました。」

といって しばらくすると 王りゅうが かえってきました。

きらきらかがやく いちごを 20〜40 こ とってきました。

メドラ、どんなまじょ？ とトーラはいいました。

でも ほんとうは メドラにあいたかったのです。

そして どうぶつたちに いいいました。

「いまからメドラにあってくるから、おなかがすいたら
れいぞうこから たべものをだして、あたためて たべてね。」

といって、ほうきにのって メドラのうちを たずねました。

でも、村のおおどおりには、

いろんないえがあって よくわかりません。

でも まじょのいえだとしたら すこしボロボロで小さいいえを
さがせばいいとおもって さがしました。

でも、みつけれないので

自分のねこで においを さがさせました。

でも ねこは、魚やのまえで したなめずりをしているので さがさせられません。

こまりはてたトーラに、はなしかけてくれるものがいました。

それは、少し小さいみつばちでした。

（みつばちを いつもトーラは かわいがっていたからです）

「おんがえしをしにきました。」

と、みつばちはいいました。

トーラは なぜここにいるかを はなしました。するとみつばちは

「メドラという子のいえを たずねてきたのか...」

でも すぐにいいました。

「いぜん メドラのいえのまえを とおったとき パンのにおいがしたよ。

あと その子も トーラにあいたいといっていたよ。

それと、ボロボロなおうちでは なかったから、パンのにおいがする

きれいなおうちを さがせばいいんだよ。」

といって とんでいきました。

トーラはいわれたとおりに、パンのにおいがする おうちをさがしました。

おうちも きれいでした。トントンと ドアを たたいてみました。

するとメドラが、なかからでてきて

「こんにちは。わたし、ずっと トーラさんに あいたかったんです。

ちゃんと りょうりも つくっておきました。」

トーラは びっくりして おれいをいいました。

そして メドラがつくった ごはんを たべてみました。

そうしたら おいしいこと おいしいこと、もうおいしすぎて

ほっぺが とろけてしまうほど おいしいごはんです。

トーラは

「こんなに おいしいごはんを わたしが たべても いいんですか？」

といいました。

メドラは

「もちろんです。たのしみに していたんですもの。」

といいました。

トーラはおいしいから、
ゆっくり たべようとしたときには、
たべおえて しまっていました。
そしてメドラに
「あなたは、ほんとうにまじよなんですか？」
とききました。
するとメドラは 元気がでなくなったこえて
「はい、そうです。」
といいました。すると、トーラは
「わたしも まじよなので
いっしょに ともだちになりましょうよ。」
といいました。メドラは元気をとりもどして
「はいぜひ。」といって
トーラとメドラは ともだちになりました。



ふと、うしろをむいて見ると、
ぽつんと 光が一つ、光が光ったと思うと、
どんどん ふえていって、
さいごには 二百こに になりました。
それも その光が ういているのです。
近づいてみると、たくさんのおどったり、
いろいろなことを していました。
メドラも おどっていたので
トーラも おどろうと思って
光の中に はいりました。
とつぜん ポケットから小さなへびやかえる、
やもりやいもりなどの
りょうせいのいや はちゅうるいが
たくさん でてきました。



みんなが いっせいに トーラを見ました。そして いっせいに

「ぼくとおどりませんか？」

とみんなにきかれて

みんなに

「じゅんばんに おどるから まっててくださいね。」

と、はずかしいのをこらえて せいっぱいの えがおで いいました。

たのしいおまつりも 朝までで みんな 朝になると 帰っていきました。

トーラも つかれはてて 家まで 足をひきずりながら 帰っていきました。

とちゅうで ころびそうに なったとき、だれかが いっしゅんのうちに

けがもなく 家まで おくってくれました。

じつは それは、メドラでした。

さいごに トーラが おとしていた、だいじなほうせきを

トーラの家において帰っていきました。

メドラどこいったのかしら！！★♥

じつは メドラは トーラの家の上に 家をたてようと思って、
せかい中から 木のいたを あつめようと ほうきにのって いま海のうえをとんでいます。

だから、ほんとうは ひっこすというのは

トーラの家の上に、家をたてようと していただけなんです。

でも、とちゅう メドラがとんでいる 30mさきから 50mよりも 大きいつなみが
メドラを のみこんで しまいました。

メドラはおよげるのですが、あまりにもつなみが大きかったので のみこまれてしまいました。

でも、トーラは ゴオーゴオーと 海があられているのに 気づいて、
ほうきにのって 海まで いきました。

海がんに つくと だれかの手が みえたので

すぐさま ほうきにのって、手の見えたほうに とんでいきました。

手をつかんで すなはままでいくと、

それは なみにのまれたメドラでした。

海におちたときの しょうげきで 大けがを してしまったので、トーラが てあてをすると
メドラは おれいをいって これまで あったことを ぜんぶ言いました。

そして、トーラは メドラといっしょに 自分の家で くらすことにしました。

それからというもの
毎日たのしい日びを
おくりましたとさ。
めでたし めでたし。





～はじめてのシュノーケリング～

ある日、トーラが おきなわの うみねで さんぽをしていると、
とてもちいさい 20 人ほどしか のれないボートが 出てきました。

おにいさんが 中から出てきて、

「いいところに さんぽを している人がいて、
きょうは おきゃくさまが、だれもこなくて かなしかったので、
いろいろな人にシュノーケリングをする たいけんがあるので さんかしてください。
と、たくさんの人に言ったのですが、だれもきてくれなくて、さがしていたところなんです。
さあいっしょに ボートにのって シュノーケリングをしにいきましょう。」

と、おにいさんに さそわれて、やさしいトーラは、いっしょに ボートにのりました。

でも トーラには、「シュノーケリング」という ことばが わかりませんでした。

そして しばらくすると、おにいさんが、

「もくてきちに とうちゃくしました。さあ、これを 上ぎの上に きてください。

このくつは、そのくつを めいで はいてください。

そして このあしひれを はいて、このマスクを つけて 口で このぶぶんをかんで、
海の中に つけてください。たくさん さかなや さんごが 見えますよ。」

とおにいさんが 言いました。

さっそく トーラは、おにいさんの 言ったとおりに、きがえて、海を見ると、
トーラは びっくりしました。

とっても きれいなさんごが、あちこちに ちらばっているように、
すきまもなく びっしりです。たくさんの さかなが およいで いました。

「これが シュノーケリングなんだな。」

とトーラは 思いました。